

日本大学をつくった先人たち

第9回

第2代総長 平沼騏一郎

実は私の素志と違ふ。司法大臣になるより、寧ろ大審院長で司法部をよくし、停年で退きたいと思つてゐた。それが入閣するやうになつた。これより私の境涯が變つて来た。時勢も變つて来たので、元のやうなことは段々なくなつて来た。

大 正12年（1923）9月、第21代内閣総理大臣加藤友三郎の急逝にともない組閣を命ぜられた山本権兵衛は、大審院長であつた平沼騏一郎に司法大臣として入閣することを懇願しました。山本は、自分も老軀（退役海軍大将、元首相、71歳）を押し出さるのだから、いやだろが是非入つてくれと平沼を説得の最中に、関東大震災が起つたのでした。地震がなければ断るつもりであつたと、平沼は回顧しています。は

じめの引用文は、そのときの談話で、昭和17年6月23日、平河町の機外会館で行なわれた平沼の口述筆記です。

司法官人生一筋

平沼騏一郎は、慶応3年（1867）美作国津山（岡山県津山市）に、津山藩士平沼晋の次男として生まれました。斎藤淡堂・宇田川興齋・箕作秋坪に漢学・算術・英学を学んでいます。明治21年（1888）帝国大学法科大学を卒業後、司法省参事官試験を命ぜられ（民事局勤務）、平沼の司法官人生が始まります。23年に東京地方裁判所判事とな



平沼騏一郎

り、千葉および横浜地方裁判所部長を勤め、32年（1899）東京控訴院検事、38年大審院検事、司法省民刑局長、大審院検事局次席検事・兼司法省刑事局長、司法次官を歴任して大正元年（1912）検事総長、大正10年10月大審院長、そして、12年9月第2次山本権兵衛内閣の司法大臣に就任という、司法畑一筋の人生を歩んできた平沼でした。

平沼と日本大学とのかわり、遡って明治30年（1897）、本学の講師として「民法」の講義を担当したことに始まりますが、会田範治（明治34年日本法律学校卒業、後日本大学教授）は「平沼先生は債権法を担当していたが東大でも同じく講義、中央（後の中央大学）では刑法講義をしていたようだ。平沼先生は実に明快であつた」と回顧しています。

この当時、維持員でもあつた平沼でしたが、翌31年9月、日本法律学校の財団法人認可申請をするため、九段坂上の富士見軒で維持員会が開催されました。そこで「日本法律学校寄付行為」規定が採択され、その規定に従つて理事選挙を行い、斯波淳六郎と平沼が理事に選出されました。その後、斯波が内務省宗教局長に就任することと理事を辞任、代つて東京帝国大学法科大学教授戸水寛人が理事に就任し、松岡康毅校長・平沼・戸水両理事の3名での運営体制がで

日本法律学校から日本大学へ

きました。こうして廃校問題から脱却し学校再建がはかられ安定をもたらします。

しかし、慢性的に引き続く学生数の少なさ、財政難、経営の困難などをいかに克服し、機構制度や施設の整備拡充をはかつて、大正9年の大学令による大学昇格をいかに実現させるか、大学首脳陣の方針・役割はきわめて重要でした。この難局に、「戸水氏の放胆、平沼氏の細心、一は奇、一は正、前者は断じ、後者は行う、両々相補ふて日本大学は絶好の経営者を有するものと言はざるべからず」と『日本』新聞（明治39年6月20日）が評したほど、松岡校長のもとで平沼・戸水両理事は経営改善に努めました。明治36年（1903）の専門学校令の制定により、校名を「日本大学」と改称し、予科の設置、



戸水寛人（1861～1935）。日本法律学校理事、弁護士、衆議院議員



平沼騏一郎別邸「知新館」表門
岡山県津山市
国の登録有形文化財

明治33年10月 日本法律学校職員調

受持学科	講師名	兼務/箇所
民法	平沼騏一郎	東京控訴院検事
	横田秀雄	東京控訴院部長
	小山 温	東京控訴院部長
	鈴木喜三郎	東京控訴院判事
	浅見倫太郎	横浜地方裁判所部長
	嘉山幹一	東京地方裁判所判事
商法	岡野敬次郎	東京法科大学教授
	朝倉外茂鉄	弁護士
	岩田一郎	東京地方裁判所判事
	松岡義正	東京控訴院判事
	矢部 廉	農商務省参事官
	和仁貞吉	東京地方裁判所部長
刑法	石渡敏一	大審院検事
	豊島直通	東京控訴院検事
刑事訴訟法	小疇 伝	東京地方裁判所検事
	今村信行	大審院判事
民事訴訟法	宮田四八	弁護士

大学部商科の設置など教育組織の整備拡充
を実行していきました。

さらに、同『日本』新聞記事は、控訴
院検事時代の平沼は「カミソリ検事」とし
て今も法曹界の噂に上るほどで、現在は民
刑局長として司法部内に「驕兒的跋扈を
恣にしつつあり」と、ほとんど思うがまま
に振る舞っているほど存在感があったよう
です。こうした法曹社会の人脈を利用してか、
日本法律学校には表のように、控訴院・地
方裁判所・大審院の判事・検事が多数講師
として来ていたのです。

第2代総長就任

大正11年1月、寄附行為改正が認可さ
れ、「日本大学総長」職が新設されました。
3月理事会で新総長職に松岡康毅、学長に
平沼が選出されましたが、翌12年9月の関

東大震災で松岡康毅総長が被災し死去して
しまいます。同年10月に開催された日本大
学維持委員会（平沼騏一郎司法大臣官邸）、
次いで評議員会を経て、11月、平沼は日本
大学第2代総長に就任しました。その後、
昭和8年3月に辞任するまで約10年間総長
を務めることになりました。

冒頭で引用した、平沼の司法官僚として
人生を全うしようとした素志とは違う、法
曹界に隠然たる影響力を持っていた平沼ゆ
えに、その手腕と幅広い人脈を期待され、
時勢が平沼を動かしていったともいえないで
しょうか。昭和17年に行われた平沼の談話
ということを考えれば、大地震により司法
大臣として入閣したことだけが平沼の境遇
を変えたのではなく、松岡総長の死によつて
日本大学の総長に就くことにも
なった、ということが言外に含ま
れていると考えてもおかしくはな
いでしょう。

第2代総長に就任後も、大正
13年（1924）1月には、大東
文化学院（現大東文化大学）の
開設にともない初代総長に就任、貴族院議
員、枢密顧問官、枢密院副議長、枢密院
議長を歴任し、昭和14年（1939）、第
35代内閣総理大臣に就任と、時勢はさらに
平沼の人生を変えていきました。

（大学史編纂課 田淵正和）



平沼揮毫扁額「培根達支」

【参考文献】

「日本大学百年史」第一卷・第二卷
「平沼騏一郎回顧録」昭和30年